



「緑の丘に」

クリス智子

Y O K O H A M A



R I G A O K A

(ラジオパーソナリティ・エッセイスト 90年卒)

▶2022年夏、用事のある先が緑高のすぐ近くとわかり、久しぶりに母校を尋ねてみたくなった私は、学校の裏手に車を留め、見学可能を電話で確認した30秒後に正門前に立っていた。

夏休み中とあって、吹奏楽部の部員たちは自主練中。爽やかな不協和音が、空へと伸びる朝顔の蔓に絡みながら響いていた。体育館の前を通れば、バスケの低音のドリブル音とキュッキュッと鳴るシューズ。1階の廊下の窓から見える桜並木や学食へ続くグリーンの幌が張られた通り道は、とてつもなく懐かしさがこみ上げ、たしかに私はここにいた、と確信させてくれた。

この風景の中、自分はどんな学生だったのだろうか。そんなことを思っていたところに、在校生が「こんにちはー」と元気に声をかけてくれた。ハツとした私も、あやしい者ではないと伝えるかのように「卒業生です！こんにちは」と咄嗟に返した。「そうなんですなー」と笑顔で一礼しながらすれ違ったのだが、この感じが緑高の気持ち良さだったと思い出す。

ふらり寄ったわずかな時間に、高台の緑高に吹く夏の風は爽やかに心を撫でてくれた。こんないい風に吹かれていたのだなあ、とあの頃には思いもしなかった感慨にふける。高校の3年間は、濃密ながら、あっという間だったけれど、いつまでも、人生の深呼吸をさせてくれる大切な場所なのだ気づかされた。折に触れ、ふらり訪れることをおすすめしたい。

